

2026年度
入 学 試 験 問 題
(A 日 程 午 後)

国 語

注 意

- 1 「開始」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 「開始」の合図で、1/5から5/5まで問題が印刷されていることを確かめなさい。
- 3 解答用紙に受験番号を書きなさい。名前を書いてはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙の指定された解答らん^①に書きなさい。問題用紙に書いても得点になりません。
- 5 解答用紙はこの表紙の裏にあります。
- 6 「終了」^{しゅうりょう}の合図で、すぐに筆記用具を置きなさい。
- 7 問題および解答用紙は机の上に置き、持ち帰ってはいけません。

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

大学一年生の晴希と一馬は小学生の時から一緒に柔道を続けてきた。しかし、晴希は肩を怪我してしまい柔道をやめることにした。その時一馬も、柔道をやめて晴希と一緒に新しいことを始めようと考えていた。次の場面は、二人が新しいことについて話した後、晴希が自宅に帰ったところである。

なぜか、空気が冷たく感じられた。汗をかいた背中にＴシャツが張り付いているほどなのに、ふわりと、体の内側から冷たい風が吹いたようだった。

「ハル？」

晴子の凜とした声に、晴希は足を止める。姉に気づかれないように道場を横切ろうとしていた自分の後ろ姿はきつと、とても情けないものに見えているんだろうと思った。振り返ると、そこには全身汗だくの晴子がいた。ずっと練習していたのだろう、短い黒髪が汗でくっついて束になっている。

聞いたのかもしれない、と思った。

「ハルでしょ？ おかえり」

晴子は晴希に背を向け、タオルで顔の汗を拭いた。晴希は、「ただいま」と呟いたきり、何も言えなくなってしまった。

晴子の脚が、少しだけ震えている。

いつも練習していた道場なのに、なぜだか今は、足を踏み入れてはいけない場所に見える。晴希が黙ったまま立ち尽くしていると、晴子が口を開いた。

「部、やめるってホント？」

もう、タオルで汗を拭いてはいない。ただ、晴希に背を向けている。

「ほんとなの？」

晴子の声は揺れない。いつだってピンと背筋を伸ばして、晴子は正しいことを正しいと言う。間違っていることは間違っていると言う。

「ケガしたから？」

晴子の中で、人間は二つに分けられる。努力する人、しない人。自分が認める人、認めない人。

「結果が出ないから？」

柔道をやめるということは、きつと、俺は姉ちゃんにとって「認めない人」になる。晴子はいつだって晴希の前を歩いていた。晴子は誰よりも努力をしていて、晴希はその背中を見ていた。応援していた。

「ケガだって、炎症止め飲んでるし、もう治りそうなんですよ？ そうだね？ 結果なんて、努力次第でどうにでもなるんだよ」

姉ちゃん、それは姉ちゃんから見た景色だ。姉ちゃんの背中に向こうにある景色を、俺は見たことがないんだ。

十年以上ずっと柔道をやってきて、たった一度だって、見たことがないんだ。

「私は反対だよ」

晴子の声にはいつだって、一本の芯が通っている。強さがそのまま塊になったような芯。その芯はいつだって鋭く鋭く尖って、晴希の心を刺してくる。

だけど今日は少し違った。芯にいつもの鋭さがない。

「やめないでよ、柔道」

今の晴子は、自分の鋭さで自分を傷つけているようだ。

「……あんたが応援してくれるとき、私は勝てるんだよ」

晴希はやつと気がついた。脚と同じように、声も震えている。言わなければいけないことはたくさんあるはずなのに、声が出ない。

今日の前にある晴子の背中が、六年前、あの日のそれに似ている。

「ごめん」

晴希は、右手に持っていたビデオテープを強く握った。

「俺、やりたいことがあるんだ」

俺は柔道をやめたいんじゃない。新しく、やりたいことがあるんだ。

最後の一言は声に出さなかった。きつと何を言っても言い訳に聞こえるだろう、と晴希は思った。

「私は反対だよ」

晴子の声を背中に浴びて、晴希は階段を上った。自分の部屋に入ると、押し入れに片づけてしまっていたビデオデッキを取り出す。どうにか配線を正しく繋ぎ、一馬から受け取ったビデオをセットした。

明日は昼休み後に体育館に集合、という一馬の言葉を頭の中で確認し、晴希は昨日まで着ていたトレーニング用の練習着を手にとった。④
持ちの良い清潔なおいは、月曜日の柔道着を連想させる。たった一人の息子が柔道を始めたとき、父はとても喜んでいた。祖父から道場を継いだ父の背中へ、小さな晴希をおぶったってまだまだ広かった。洗剤のにおいを思いっきり吸い込みながら、晴希は一馬の声を思い出す。今日、自分の中で生まれた新しい何かが揺らいでしまわないように、一文字一文字、思い出す。

俺は、ハルと新しいことを始める。大学の学生掲示板の周りにいた人々は皆、さっきまで大声を出していた二人の様子をまだ好奇に満ちた目で見つめていた。

「ハルだって、部をやめるのはもったいねえよ。屋上で俺が言ったこと、覚えてる？」

周りの目が恥ずかしい。晴希はどこか冷静にそんなことを思っていた。逆に一馬は、⑤「そんなこと一切気にしていないように見えた」。

「ハルはな、相手を投げるとき、自分が投げられてるみたいな顔すんだよ。部の仲間や、晴子さんとかが試合してるときは、誰よりも大きな声だして、ていうか空気読まずに立ち上がっちゃったりして、誰よりも本気で応援すんだよ」

温度も色もそのままに、一馬の声は蘇^{よみがえ}ってくる。

「ハルは、自分が出られない試合だって、お前が一番疲^{つか}れてんじやねえのって勢いで応援してるんだよ。そんなこと、誰にもできない。お前はできる。俺は、お前のそんなところを誰よりも見てきた」

晴希は、応援中に立ち上がってしまう自分の柔道着を引つ張^ひつてくれていたのは、いつだって一馬だったことを思い出していた。

「ハルの人を応援する力はすげえんだ。一番お前のことを見てきた俺が言うんだから間違いない。部をやめて、ハルのこんなにすげえところまで無くなっちゃうのは、もったいねえ」

試合に出られない自分。主役になれる自分。だからいつも、応援するしかなかった。

姉や、一馬や、仲間の姿。彼^{かれ}らの後ろ姿を見ながら、晴希はいつだって声を張り上げていた。

「ハル、この世にはな」

一瞬^{いつしゅん}、周りの目が気にならなくなった。

「人を応援することで、主役になれるスポーツがあるんだ」

容赦^{ようしや}のない陽射^{ひざ}しの熱が、自分の心のある一点に集中した気がした。晴希はそのときの感触^{かんしよく}を、今でもありありと思い出すことができる。

カズはいつだって、この笑顔^{えがお}で俺を巻き込^こんでくれていた。楽しくて、腹がよじれるくらいおかしな出来事に、俺たちはいつだって二人で飛びこんでいった。

「そんなめっちゃくちやかつこいいスポーツがあるんだよ」

一馬の顔が急に、少年時代のそれに見えた。

「……一発おもしろいことしようぜ、ハル」

一馬はそう言って、出会ったころのように白い歯を見せて笑った。

プールの塩素^{えんそ}のおいもそのままに学校を脱^ぬけ出したときも、こんな気持ちだったのかもしれない。晴希は思った。ほんの少しの決意^{けつぎ}が圧倒^{あつうてき}的な罪悪感^{ざいあくかん}を上回る瞬間がある。そのとき、人は、絶対に脱^ぬけ出せないと思^{おも}っていたところから、一歩踏^ふみ出^だすことができる。

（朝井リョウ『チア男子!!』）

*六年前、あの日のそれ：晴希が中学二年生のとき、晴子は男子にいやがらせを受けて立ち向かったが、力の差に敗れてしまった。くやしさのあまり「男になりたい」とさげび、晴希に向かって「ハルは男だから、誰よりも強くなれるんだよ。柔道ずっと続けてよ」とうったえた。

問一——線部①「晴希が黙ったまま立ち尽くしている」とありますが、この時の晴希を説明したものとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 柔道をやめようとしているので、晴子のためにも道場に入らないようにしている。

イ 柔道をやめようとしているのに、晴子がいる道場に入ると決心がゆらぐと思っている。

ウ 柔道をやめようとしているので、今の自分は道場に入るべきではないと思っている。

エ 柔道をやめようとしているのに、道場に入る自分の姿を思い浮か^うべてとまどっている。

問二——線部②「姉ちゃんの背中^{せなか}の向こうにある景色」とありますが、これは晴子のどのような考え方から見える「景色」のことですか。次の文の（ ）に入ることを本文から二十字程度で探し、最初の五字を書きぬきなさい。（ ） 。 記号は字数に数えます。）

（ ） という考え方から見える「景色」。

問三——線部③「脚と同じように、声も震えている」とありますが、この時の晴子を説明したものとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 晴希の応援がなくなることにあきらめを感じていたが、最後には考えを変えてくれるのではないかと期待している。

イ 晴希の応援がなくなることに対して反^{はん}対していたこともあり、こちらの話を聞^きこうともしない態度に怒^{いか}りを感じている。

ウ 晴希の応援がなくなること^に理解を示していたはずが、説得が間に合うのではないかとの迷^{まよ}いが生じている。

エ 晴希の応援がなくなること^に不安を感じていたため、これまでの言い方とは裏腹にすぎるような思いになっている。

問四——線部④「気持ちの良い清潔^{けつせつ}なおひは、月曜日の柔道着を連想させる」とありますが、晴希が連想した「月曜日の柔道着」が象徴^{しやうちやう}するものとして、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 幼いころに感じた父の背中^{せなか}の広さ。 イ 柔道一家を支えようという責任感。

ウ 心新たに取り組もうとする気持ち。 エ 改めて確認している自分の誇り。

問五——線部⑤「そんなこと一切気にしていないように見えた」とありますが、「そんなこと」が指している内容を二十字以内で答えなさい。（ ） 。 記号は字数に数えます。）

問六——線部⑥「晴希はいつだって声を張り上げていた」とありますが、晴希自身と一馬は、このような晴希をそれぞれどのようにとらえていますか。それを説明したものとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 晴希は試合に出なかったが応援するしかなかった。一方、一馬は誰よりも本気で応援できる晴希に一目置いていた。

イ 晴希は試合に出る代わりに応援することを選んだ。一方、一馬は誰にもできない本気の応援をする晴希に嫉妬^{しつと}していた。

ウ 晴希は応援することで主役になろうと思っていた。一方、一馬は周りの空気も読まず応援をする晴希がうらやましかった。

エ 晴希は応援を通して試合に出ているつもりであった。一方、一馬は応援だけで誰よりも疲れてしまう晴希に驚^{おどろ}いていた。

問七 ――線部⑦「それ」が指している内容を説明した次の文の（A）・（B）に入ることばを本文から探し、それぞれ指定された字数で書きぬきなさい。（、）。記号は字数に数えます。）

この上なく（A 五字以内）ことに、いつも自分を引き入れてくれた（B 二字）。

問八 ――線部⑧「ほんの少しの決意が圧倒的な罪悪感を上回る」とありますが、これはどういうことですか。本文全体を読んで、晴希の心情にそって五十字以内で説明しなさい。（、）。記号は字数に数えます。）

問九 本文について説明したものとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア テンポ良く短い文を重ねることで、晴希の心の変わりやすさを表現している。
- イ たとえの表現を使うことによって、登場人物の人物像の違いを伝えようとしている。
- ウ 過去から現在へとつながる時間の中で、晴希と一馬の関係の変化を描いている。
- エ 前半は現在のことが描かれ、後半は心を決めたいきさつが回想を軸に描かれている。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

Ⅰ 生きている以上、生き物は自分の身を守らなければなりません。成長もしなければいけない。交尾をして、DNAを未来にソングさせなくてはならない。こうした生き物としての大義名分がある以上、心がなかったら務まりません。動物種が成立し続けるためには同族間の干渉が必要不可欠です。

集団生活者の動物もいれば、単独生活者の動物もありますが、単独生活者の動物も一生単独かというところではありません。同族のオスとメス、または老体と若者、または子どもなどの関与があるわけです。とくに繁殖期や子育て期などには、他個体との関与がどうしても重要になります。心がなければ、同族の他者との関与、すなわち複雑な意志の疎通はできないわけです。

怖かったり、うれしかったり、おいしかったり、悲しかったり、頭にきたり、いろんな感情があるからこそ生き物は、その命を維持していくことができるのです。命あるもの、心もあるということですね。

もしかしたら、次元が違うだけで、ばい菌にだって心があるかもしれない。

これは、わかりませんけどね。でもこんな実験があるんです。単細胞生物の、原生動物であるゾウリムシは皆さん知っているでしょう。でかいばい菌みたいなやつです。こいつに、光の当たるほうに泳いでいったときに電気ショックをあたえるようにすると、光のほうに行かなくなるんです。

あんな生き物だって、痛い目にはあいたくないんですね。ゾウリムシなんて、光学顕微鏡で楽に見えるほどの大きさはあるものの、単細胞の原生動物ですから身分的にはばい菌とほとんど同じです。でも、苦しみに対してちゃんとイヤがる反応をするわけです。

ということは、これも心なんじゃないか。「苦しくて痛いのはヤだな」と思うから、学習してそっちには行かなくなるわけです。ですから高等動物だけではなくて、③の差こそあれ、ばい菌やウィルスのようなものにも、心がないとは②ダンゲンでできないんじゃないでしょうか。

生き物が生きていくためには、複雑な反応が必要なんです。心というのは結局、反射・反応の連続です。反射・反応の連続が、うんと複雑になって、心になっているのです。

生きていくための反射や反応が、ある一定の複雑さになってはじめて人間は「心だ」と認めます。でも、人間が心とは認めない未発達な心も、本当は心として認めてやらなければいけないのではないかと思います。

〈中略〉

Ⅱ 「心的なもの」はあるでしょうね、きっと。

僕は植物マニアでもあるのですが、やはり植物にはあまりにもリアクションがないので、ときどきセワすることに飽きちゃうときがあります。そうすると花が咲かないんですね。

手入れはいつもどおりやっています。鉢植えを買った者の義務ですから。ところが、その植物に対して興味がなくなったジテンで、いつもと同じセワをしているのに、しおれたり花が咲かなかったり、どうも調子が悪くなってくるんです。

植物の意志としては、やはり「動物と仲良くしたい」なんじゃないでしょうか。

はじめに植物があつて、動物は発生したのです。植物が光合成をして大気中に酸素が増えたおかげで動物が進化できたわけで、そういった意味では、植物は⑤なんです。動物は、植物から蜜や果実などの栄養をもらいますが、非常にスローモーションにしか動けない植物の代わりにこまごま動き、植物の役に立つことをしてオンガエしをしています。いろんな生き物が、お互いに助け合って成立しているのが、地球のシステムなんです。

植物も生き物なので、生きている以上は、次世代の種を飛ばさなくてははいけない。その種ジタイが、ほかの種と競合しながらも、ソングしていかねばはいけない。とすると、そういう「がんばるぞ！」みたいな心のようなものはあるんじゃないでしょうか。

これは想像ですがもしかしたら植物の心というのは、個体には備わっていないくて、植物の「種全体の心」のようなものなのかもしれません。というのも、動物と植物で、あまりにも生き方が異なるものですから、われわれ動物的な生命体からすれば、まったく想像もつかないような次元の可能性もあるわけです。とにかく、生き物である以上、きつと心的なものはあると、僕は信じています。

私たちの気持ちの中にそういう思いがあるから、鉢植えを生ごみに捨てたりすることに対して心が痛むんじゃないでしょうか。たとえば花が終わった、頂きものの蘭の鉢植えなどです。花が散ったらただの葉っぱだし、邪魔なわけです。かといって育てるのも手間がかかるし。でも、なんとなく捨てられないんですね。そんなふうに思うのは、「もしかしたら、こいつ悲しんでいるのでは？」ということ、私たちが漠然

と感じている証拠しょうこなんじゃないでしょうか。

僕も不思議でしょうがないんですが、動物と植物の間に交かわされる何らかの約束事、こればかりははっきりとはわかりません。「動物側」に生まれた以上、植物たちの心を知るには限界というものがありますから。

Ⅲ もうひとつ俯瞰ふかんで見ると、生命体すべてに対して、管理する心のようなものがあるのかもしれないと思うことがあります。それはたぶん、「地球の心」なんでしょうね。

増えすぎた動物の数が自然に減ることがあります。人間の世界にも、飢饉ききんとか大地震おおじしん、津波つなみなどが襲おそうことがあります。あるいは自然災害だけでなく、人間同士が戦争をしたりします。これは何者かの意志によって淘汰*とうたされてるんじゃないかと。

花壇かだんにスミレを植えてきれいなお花畑にしようと思ったのに、ぺんぺん草がいっぱい生えてきました。ぺんぺん草は当然引ひっこ抜ぬかれますよね。つまり、管理する心から見て、調和を乱すものは間引かれてしまうのです。

このように生き物はときどき、自分よりも次元が上の、見えない存在に調整されているんじゃないかと思えることがあるわけです。だからこそ、人間という生命体が、⑧ という花壇の中の⑨ にならないように、気をつけなければいけないのではないのでしょうか。

カンブリア紀に、まるで生物大爆発だいはくはつみたいのに、ヘンテコで芸術的な、試行錯誤しこうさくご的な動物たちがいっぱい生まれてきました。あれは花壇の持ち主が、「家庭菜園7」にしてキュウリやナスを作ろうか。いやまてよ、食べられないけどパンジーのほうが、お母さんは好きだしな。でも息子は朝顔でも植えて、夏休みの観察日記を書きたいだろうし。でも俺おれはやっぱイモを育てて食いたいんだよな……」「そんなふう迷った結果なのではないかという気がします。そのときにわけのわからない、それこそうデッサンの狂くるったような生き物がゴチャゴチャと発生したのです。そして一気に、「ダメだこりゃあ。やーめた」となって、何かの力が大量絶滅ぜつめつさせたわけですね。

そしてその中の、ナメクジの王様みたいな生き物が、脊索動物せきさくどうぶつのゲンケイ8として生き残りました。つまり背骨を持って、それを芯しんに左右対称たいうしやうの体をもつ生き物が発達できたのです。すなわち目が二つ、手と足が二本ずつ、鼻の穴二つ、背骨一本、しっぽ一本、頭一個、口ひとつ。そう考えると、基本的に進化上、魚から先はみんないつしよですね。ばい菌にもゾウリムシにも昆虫にも心がある。魚類9にもリョウセイ類にも爬虫類はちゆうるいにも鳥類にも哺乳類ほにゅうるいにも心がある。すべてに心はあるにちがいません。しかし、それぞれの動物が「自分より下等な動物には心がない」と思って生きている様子です。だからこそ、我々人類は、「地球」という最上位の管理者を怒らせないように、自然界の調和を乱すことなく、注意して生きるべきです。

（野村潤一郎『サルが食いかけでエサを捨てる理由』）

* DNA…遺伝子の情報を記録している物質。

* 俯瞰…広い視野で物事を見たり考えたりすること。

* 原生動物…アメーバやゾウリムシなどの単細胞生物。

* 淘汰…良いものを選んで、悪いものを捨てること。

問一 Ⅱ線部1～9について、カタカナを漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

問二 Ⅰ線部①「こうした生き物としての大義名分」とありますが、これはどのようなものですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 命を次へつなぐために、他種より成長するという目的。
 - イ 命を次へつなぎ、環境かんきやうの変化から身を守るという目的。
 - ウ 自分の身を守り、新しい命を次へつなげるという目的。
 - エ 自分の身を守るために、他種と共に生きるという目的。
- 問三 Ⅰ線部②「命あるもの、心もある」とありますが、これを説明したものととして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 生命活動を行うためには、同族の仲間と様々な意志や感情のやりとりが必要であるということ。
- イ 集団で生活するためには、年齢ねんれい、性別に関係なくコミュニケーションを取る必要があるということ。
- ウ 種族が生き残るためには、他個体と関わらず子育て期を乗り越こえる必要があるということ。
- エ 様々な感情を芽ばえさせるためには、他個体と複雑な意志のやりとりが必要であるということ。

問四 Ⅲ③に入ることばをⅠから二字で探し、書きぬきなさい。

問五 Ⅰ線部④「人間が心とは認めない…：いけないのではないかと思います」とありますが、その理由を説明した次の文章の（A）。（B）に入ることばを本文から探し、それぞれ五字以内で書きぬきなさい。（ ） 。 記号は字数に数えます。）

ゾウリムシのような生き物でも、電気ショックという（A）を感じないように行動する。このように、生きていくための（B）の連続を、未発達ではあるが心であると筆者は見なしているから。

問六 Ⅴ⑤に入ることばとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 地球の原点
 - イ 動物の母
 - ウ 進化の要因
 - エ 栄養の宝庫
- 問七 Ⅰ線部⑥「そんなふう思う」とありますが、「そんな」が指す内容として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
- ア しおれてしまった植物を捨てることに抵抗ていこうを感じない。
 - イ 頂いた鉢植えんりょえだから誰だれかにあげることに遠慮はしない。
 - ウ 手間をかけて育てた植物であってもめかれるのは仕方がない。
 - エ 鉢植えの花がかれてしまったてもただのゴミだと割り切れない。

問八 Ⅱの小見出しとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア すべての動物に心はあるのか

イ 植物に心はあるのか

ウ 植物の心が分かるのか

エ 動物と植物は心が通じ合うのか

問九 — 線部⑦「増えすぎた動物の数が自然に減ることがあります」とありますが、筆者はこのことをどのようなようにとらえていますか。「調和」、「調整」ということばを必ず使って、解答らんのことばに続くように三十五字以内で答えなさい。(、 。 記号は字数に数えます。)

問十 本文の⑧・⑨に入ることばをそれぞれ本文から探し、⑧は二字で、⑨は五字で書きぬきなさい。(、 。 記号は字数に数えます。)

問十一 Ⅲの の部分を読んで三人の生徒が話しています。(A)・(B)に入る内容として最も適当なものを、あとのア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

生徒X カンブリア紀に、たくさんの生物が爆発的に生まれたんだね。

生徒Y そうだね。不思議な生物がたくさん生まれたみたいだよ。

生徒Z その生物大爆発のことを説明しているところに、どうして「家庭菜園」の話が出てきたのかな。

生徒X それは、(A)、多様な生物が生まれた様子を説明するためじゃないのかな。

生徒Y なるほど。だから、家庭菜園の話が書いてあったんだね。

生徒Z だけど、その時生まれた生物の大半が、何の前触れもなく死んでしまうよね。

生徒Y 生物の進化はそこで止まってしまったのかな。

生徒X 違うよ。ナメクジの王様みたいな生き物が残り、進化が続いたんだ。

生徒Z その進化について、「魚から先はみんないっしょ」と書いてあるけれど、これはどういうことなんだろう。

生徒Y たぶん、(B)ということをおもうとしているのだと思うよ。

生徒X だから、私たち地球の一員だということを自覚して生きていかなければならないんだね。

A 家庭菜園で育てる植物についていろいろ思索したあげく、まとまりがつかなくなったという具体例を示して

イ 家庭菜園で育てる植物について家族の好みを優先したところ、自分の考えと違ってしまったという具体例を示して

ウ 家庭菜園で植物をどのように育てるのが良いか調べて、効率的な植物の育て方が分かったという具体例を示して

エ 家庭菜園で植物を育てることについて考えたけれども、自分だけでは決められなかったという具体例を示して

B ナメクジみたいな生き物が生き残らなければ進化も止まっていたので、どんな生物も大切にすべきだ

イ 背骨を持つている脊索動物が誕生し魚へと進化したということは、人間ではなく魚が進化の起点である

ウ 脊索動物は魚から先は進化上みんな同じということなので、人間だけが何よりも優れているわけではない

エ 背骨を持った生き物が進化して人間になったので、背骨を持たない生き物が見下されることになった

問十二 本文に書かれている内容として適当なものを次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 地球上にいるすべての生き物は、他の種族とお互いに感情を伝えあうことで命をつないでいる。

イ 動物と植物の間に交わされた何らかの約束を、私たち人類はいつか知ることができるはずだ。

ウ 植物に備わっている心は個体にあるのではなく、植物の「種」全体の意志や反応だと考えられる。

エ 生命が爆発的に増えたり減ったりするのに、宇宙全体を支配する何か大きな力が働いている。

オ 地球上のそれぞれの生き物は、自分よりも下等な生き物には心がないと考えているようである。

問一

問二

問三

問四

[illegible]

問六

問七

A

B

[illegible]

1	ソソゾク		7	菜園	
2	ダダゲン		8	ゲンケイ	
3	セウ		9	リヨウセイ	
4	ジテン				
5	オンガエ	し			
6	ジタイ				

問二

問三

問四

問五

A

B

問六

--

問七

--

問八

問九

[illegible]

問十

⑧

⑨

問十一

A

B

問十二

受 験 番 号

一

問一ウ

問二結果なんて

問三エ

問四ウ

大	の
声	好
を	奇
出	に
す	満
自	ち
分	た
た	目
ち	。
へ	

問六ア

問七Aおもしろい

B笑顔

新	う	や	を	め
し	と	姉	や	た
い	す	と	め	さ
こ	る	続	る	を
と	気	け	こ	振
に	持	て	と	り
挑	ち	き	へ	払
戦	が	た	の	う
し	、	柔	後	
よ	父	道	ろ	

問八

問九エ

ということ。

二

1	ソソゾク	存続	7	菜園	さいえん
2	ダンゲン	断言	8	ゲンケイ	原型
3	セワ	世話	9	リョウセイ	両生
4	ジテン	時点			
5	オンガエ	恩返し			
6	ジタイ	自体			

問二ウ

問三ア

問四次元

問五A苦しみ

B反射・反応

問六イ

問七エ

問八イ

問九

生	る	乱	る
命	地	す	
体	球	も	
す	の	の	
べ	心	を	
て	が	調	ということ。
を	、	整	
管	調	し	
理	和	て	
す	を	い	

問十⑧地球

⑨ぺんぺん草

問十一Aア

Bウ

問十二ウ

オ

(順不同)

受 験 番 号